



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	佐藤 拓司「墮天使の倫理 : スピノザとサド」
Author(s)	水野, 浩二
Description	
Citation	哲学, 39, 81-87
Issue Date	2003-07-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/48032
Type	departmental bulletin paper
File Information	39_81-87.pdf



《書評》

佐藤拓司『墮天使の倫理 スピノザとサド』（東信堂）

水野 浩二

ベルクソンは『創造的進化』のなかのある箇所で、デカルト、スピノザ、ライプニッツを並べて論じている。フーコーは『言葉と物』のなかのある箇所で、サド、ニーチエ、アルトール、バタイユを並べて論じている。前者は理性（合理）主義者の系譜である。それに対して、後者は非理性（非合理）主義者の系譜と見なしてよいであろう。こうした図式に慣れ親しんでいるわれわれ読者は、本書においてスピノザとサドが結びつけられていることに、一瞬とまどいを覚える。ところが著者は、スピノザとサドを見事に結びつける。しかも「墮天使の倫理」なるものを介して。

本書はタイトルで読者をひきつける稀有な研究書である。しかし、本書の真の価値はもちろんそこにあるのではない。本書の価値は、その一貫した論旨の明快さ、着想の斬新さ、精緻な論証力にある。以下において、本書の論証の軌跡を著者の論述に即してまとめ、そのあとで、私なりのコメントを若干付け加えておきたい。

まず手始めに、本書の基本的モチーフを、本書からの直接的引用によって紹介してみよう。たとえば本書の終章に、以下のような文章が見られる。「スピノザは道徳を自然主義的に基礎づけようとする。すなわち、自己保存の力に根差した理性の導きでもって、人々の間に社会性および共同性を築き上げようとする。スピノザにおいては、自己保存の衝動が、本来それと対立する立場にあるはずの理性の導きと一体とされている。他方、サドはスピノザと同じ自然主義的道德観から出発しながらも、その倒錯した知性のもたらす閉鎖的言語体系ゆえに、背徳主義へと陥った。スピノザの利己主義的道德が、サドのなかでより純化され、大きく育成されて背徳主義が誕生した」(二三九・二四〇頁)。以上の引用文によって、本書のなかで著者が述べようとしていたことはほぼ要約されている。

さて、著者は議論を始めるにあたり、「知性の自律」および「道徳の自然主義的基礎づけ」といった言葉をキー・ワードとして持ち出してくる。そしてそれが墮天使、スピノザ、サドの三者を一本の線で結びつけるもの、とされる。というのも、スピノザは、デカルトから受け継いだ知性(理性)の力でもって自然および人間世界のあらゆる現象を理解することができると考えたのであるが、そうした考え方は、墮天使がなそうとしたことにも通じるものであったからである。さらには、スピノザの理性は、自己保存の力に根差しているがゆえに、その道徳体系は倫理的利己主義へと向かうことになるのであるが、そのことを利用して、サドは背徳主義の哲学をつくりあげてしまったからである。こうして、著者によれば、本書の課題は、「スピノザの哲学がいかんにして無道徳主義を生み出し、そしていかなる仕方でもサドの背徳主義と結びつくことになるのか」(iv頁)ということを説明することにある。そして、そうした結びつきのあいだに介在しているものが墮天使なのである。

端的にいつて、「墮天使」とは、〈知性の自律した姿〉の謂いである。確かに、中世的視点からすれば、墮天使は、知性による罪かもしれない。だが視点を変えれば、墮天使は知性の自律した姿ともいえる。したがって、今や、知性が超越的な価値規範（神の恩寵）に依拠することなく自然主義的に道德を基礎づけることができるかどうかが問題となる。著者によれば、墮天使は超越的な価値規範に依拠することなく、自然主義的に道德を基礎づけることができる、という。なぜなら、墮天使は自らの自由意志で墮ちたからである。すなわち墮天使は、「倒錯した意志」をもつゆえに、自らの知性を神の叡智から逸脱させてしまうからである。天使といえども超自然的な事柄、すなわち恩寵の世界の事柄については過ちを犯してしまう。だが、自然的事柄については間違ふことはないのである。

神の恩寵を失うことにつながる道を選択した墮天使は、「傲慢」である。なぜなら、墮天使は、「神のごとくあることを欲した」からである。それは罪なことでもある。これが「倒錯した意志」の正体である。天使の知性は、自らの知性によって把握することのできないものを認めることができなかった。それが彼を傲慢にした。しかし、そうした傲慢さが近代合理性を生んだともいえるであろう。著者は、墮天使に近代的知性の萌芽を見る。この点が、本書の議論において、いわばスプリングボードの役目を果たしている。著者によれば、「墮天使が自由意志によって選んだ道は、合理主義的な近代倫理の原点」（二二頁）と見なされるべきである。ここに至り、本書は前半の山場を迎える。というのも、ここに至り、純粹知性の働きは、十分に道德的たり得るのか、という現代における自然的倫理の問題をわれわれにつきつけるからである。換言すれば、著者の議論の出発点にあった「知性の自律」と「道德の自然主義的基礎づけ」という問題に直面することとなる。そしてそれは同時に、後半の最大の課題である、利己主義（スピノザ）から背徳主義（サド）へと至る倫理学研究の始まりともなる。

著者によれば、「スピノザの知性は、本来の天使的性格と墮天使的性格の両面をもっている」（四八頁）、といえる。そして、『エチカ』の体系は、一旦理性および知性の優越性を認めたあとは、その徹底した合理性でもってすべてを理性の支配下におこうとするものである。そのとき、スピノザの哲学は墮天使的性格を有し、サド思想を生み出す母体の役割を果たすことになる。著者によれば、スピノザの知性には、一方において、外部との関係にかかわる表象力に基づいた知性がある。それはスピノザ本来の知性であり、他者との共感作用をもとに功利主義的方向に発展する萌芽を含んでいる。これがいわば知性の天使的性格と呼ばれているものである。他方において、自らの根源を忘れた表象力を卑しむ合理的・合理主義的性格をもった理性知・直観知だけで自存できるとする知性がある。そうした知性は、理性の自律とも呼ばれる徹底して効率を重視する倫理的利己主義に陥る。そしてそれこそが、墮天使の倫理と呼ばれるものでもある。

ここで、本書のタイトルにもなっている「墮天使の倫理」という表現の真の意味を確認しておこう。そもそも道德は、神学の枠組みのなかにあるかぎり、神的意志および恩寵によって根拠づけられる。すなわち神的意志の命令に従うことが善であり、それに背くことが悪となる。この場合、義務論が道德の中心に据えられる。それに対して、道德が自然主義的な仕方では根拠づけられているならば、すなわち外的な規範なしに人間の感情や情念によって根拠づけられるならば、善と悪とのあいだには、価値論的な区別はなく、質的・意味的な区別が与えられることになる。知性が自然および人間の本性を理解し、それによつて独力で道德を基礎づけることができるならば、神的意志や、神によつて定められた永遠の法が人間本性のなかに表現されたものとしての「自然法」などは、必要なくなる。その際、知性は、自然を理解する場合だけでなく、道德的判断をおこなう場合にも、自律的に振舞うことができる。その結果、道德は自然主義的な徳だけでもって完

成されることが出来る。以上が「墮天使の倫理」と呼ばれているものの提要である。

こうして著者は墮天使を定義するに至る。「墮天使とは、自らの本性たる知性を過信し、他律と強制を排除して自律的であろうとし、自らの力だけでもって最高の善たる神を愛し欲しようとする知性的存在である」(一五八—一五九頁)。恩寵の論理からすれば、墮天使は「傲慢」と見なされ、地獄に落とされる。だがしかし、この傲慢な墮天使こそが近代的知性の先駆けなのである。墮天使は、恩寵による超自然的支配を脱し、自らの知性を信じて、自らの秩序を作り出そうとした。これは近代的自我の成立と軌を一にする。こうして著者は、「近代知性、そしてまた近代合理論の信奉者とは、まさに墮天使そのものである」(二五九頁)と断ずる。著者はスピノザの倫理学を、外的規範から脱却し、自らの理性の内在的な規範に従う近代合理論の倫理学の典型と見なす。さらには、スピノザの倫理学の立場を具現化したのがマルキ・ド・サドその人である、とする。

自らの理性の内在的な規範に従うスピノザの倫理学には利己主義的傾向がつきまとう。そして倫理的利己主義が、その内在的矛盾から最終的には無道德主義に陥り、それがサドを背徳主義に導いた。これが著者の鑑定結果である。もつともここには、著者も指摘するように、サドによるスピノザの「逆転」がある。すなわち、サドはスピノザの本来の意図を無視してスピノザの自然主義的倫理を極端なところまで追及し、ついには倫理あるいは道德を破壊して、その代わりに悪徳を礼賛するという背徳主義にまで至った、というわけである。したがって、サドの背徳主義は、著者によれば、「スピノザの試みた倫理の自然主義的な基礎づけが極端な形にまで進んだときに産み落とされた落とし子である。しかも最悪の落とし子だといえる」(二六四頁)。(サドの背徳主義はスピノザ倫理学の「落とし子」なのだろうか。「鬼子」ではないのだろうか。『週刊読書人』の書評子は「鬼子」と読み替えているようである。)

スピノザもサドも道德に向かうという出発点は同じだった。彼らはともに自然主義的立場から心理的利己主義を用いて

道徳を基礎づけようとした。もっとも、スピノザの自然主義は、神に対する絶対的信頼のうえに立っていた。しかしサドにはそのような信頼はなかった。その結果、スピノザの倫理学は「神への知的愛」に結実したのに対して、サドの道徳は「悪徳の栄え」に至ったのである。

三

背徳主義者サドといえども合理的な道徳を否定したり侮蔑したりしない。それは背徳主義者の出自は合理的な道徳にあるからである。ではなぜ、サドは合理的道徳を「逆転」できたのか。それは「倒錯」のせいである、という。倒錯により、利己主義も合理主義も歪曲されてしまったのである。「知性の倒錯が閉鎖的体系としての自我を作り出し、利己主義の倒錯が自虐的なまでの悪の追及を生み出す」（二三三頁）。そしてサドは倒錯によって自らの世界を確立することができた、という。いつたい、倒錯によって完全に己だけの世界に自閉してしまったサドと、われわれはどのようにして議論したらよいのであろうか。著者は、そのようなサドをあえて哲学の舞台に引き上げ、衆人環視のなかで尋問しようとしているように見える。

本書の後半は、強いていえば、引用文を重ねることによって精緻な論証が展開されている前半に比べると、論証的であるよりは直観的な議論の仕方に傾いているようにも思える。その分、サド自身がスピノザのどこをどのようにに利用し、またどのようにに「純化され、大きく育成され」たかが判然としない。論文がいわば説明的になってしまった嫌いがなくもない。

たとえば、恩寵による超自然的支配を脱し、自らの知性を信じて、自らの秩序を作り出そうとする「傲慢」な墮天使と、

近代知性（近代的自我）との同一性が何度も強調されるが、そのこの内実が見えてこない。つまり、読者は同一であることの指摘の次に何かを期待してしまう。著者は、墮天使（『近代知性』）に、神学からの解放という積極的な意味を見出そうとしていると同時に、消極的意味合いも感じているようである。たとえば注のなかで、「近代知性の自律に暴走のよなものを感ずる」（一八三頁、注（一））と述べ、「墮天使の倫理」に「そうした意味合いをこめている」と告白している。そのこと自体はまったく正しい。しかしそれだけでは、十七世紀のパスカルのデカルト批判の次元にとどまっているように思える。近代知性を、傲慢、墮天使といった言葉で表現するだけでは、近代知性が生まれてきたことの必然性のよなものが見えてこないような気がする。

確かに、サドとスピノザを結びつけることで、スピノザの一面に、さらには近代哲学史の一面に改めて光が当てられることは意義深い（自由思想家に言及している箇所があるが、この辺りは魅力的な分野であり、今後の研究課題としてはよい）、その分、近代知性、自律、さらには、本書の主題ではないが、近代主観性、といったものが矮小化されて見えてしまう嫌いがある。デカルトから四百年が経ち、さらには現代哲学においてさまざまな他者論が議論されていることを考えるなら、スピノザには他にもさまざまな読み方があるに違いない。

最後に、本書は哲学の研究書としてはかなりスピーディな文体で書かれていることを指摘しておきたい。そのスピード感がある種のリズムを醸し出し、論旨を明快にしているといえる。時として舌足らずの印象を受けることもあるが、全体としてはむしろ好感がもてる。スピーディな文体が、本書を読み物としても成功させているように思える。スピノザは神に酔ったが、私は本書に酔った。